

バルセロナ日本語で聖書を読む会

月報第 152 号 [2017 年 10 月]

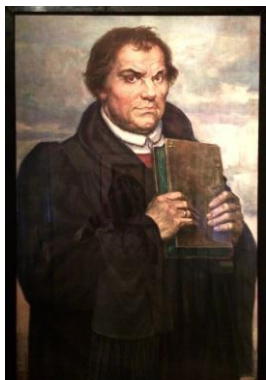
さあ、湖の向こう岸に渡ろう

ルカによる福音書 8 章 22 節

『そのころのある日のこと、イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう。」と言われた。それで弟子たちは舟を出した。』

＋・・・

主の聖名を賛美します。バルセロナ日本語で聖書を読む会の月報第 152 号をお送りします。今月は宗教改革 500 周年を記念して、ルターの人生と、彼が愛した詩編のひとつ、130 編を学びました。



ルターの人生については多くの資料で詳しく語られているので、これらの資料に加え、この夏に訪問したドイツのルター博物館で収集した資料と写真をもとにパワーポイントを作成して学びました。その後、日本キリスト教会 大阪姫松教会の藤田牧師による詩編 130 編のメッセージに耳を傾けました。

詩編 130 編は著者が自分の罪ゆえに陥った深い淵からの救いを願い、ひたすら神の憐みによる救済を求める詩で、「悔い改めの詩編」の 6 番目に数えられています。ルターはこの詩の内容が、彼が見出した「信仰による義」という福音の心理に合致していると感じたのでしょう。この詩をととても愛したと伝えられています。

この詩人が言う深い淵とは陰府のこと。そこは死の世界であって暗闇が広がり、光が差し込まず、神との生きた交わりが断られた場所。神から遠く離れたこの場所は、自分がいるべきはずの場所ではないはずなのに、こうなったのは神が自分から離れたからではない、自分が深い穴の中に落ち込んでしまったのだと認識し、神を責めず、自分の罪深さを嘆いています。

放蕩息子が父の家から遠く離れた先で落ちぶれてしまったときに気づいたように、「主よ、あなたが罪をすべて心に泊められるなら、主よ、だれが耐ええましょう」(130:3) と言って、言い訳も他への非難もなく、神にひたすら罪の赦しを請う詩人。この時の彼にとって、じっと黙っているかのような神様は助け手として最も遠くにいる存在だったのではないのでしょうか。しかしそれでも神に叫び続ける。それは彼が、神が赦してくださるのでなければ自分の罪は解決せず、この深い淵の底から抜け出すには罪が赦されなければならないことを、そして罪を赦す権威を持っているのは神以外にないことを知っているからです。

ノアの時代に洪水を起こして悪を行う人間を一掃された神は、「人が心に思うことは幼い時から悪いのだ。私は、このたびのように生き物をことごとく打つことは二度とすまい」と約束されました。つまり、そういう罪ある人間と共に歩むという決断をしてくださった。それが私たちの神様です。イスラエルですらその歴史の中で、何度も何度も罪を犯して神を悲しませていますが、神はイスラエルを見捨てずイスラエルの罪を裁いて赦すことによって、彼らの神であり続けることに徹しておられます。

7-8 節でイスラエル全体に向けた詩人の言葉は、この人が神の助けを受けることができたことを意味するのだと思います。私たちもこの詩人と同じように、深い淵の底に沈みこむことがあることでしょし、苦しみが深ければそれだけ、祈ることも待つこともつらくなるでしょう。けれども、私たちから最も遠く離れていらつしやる聖なる神こそ、私たちにとって一番近い助け手なのです。だから、どんな暗闇の中にあっても主に望みを置く者でありたいと思います。神は必ずその信頼に応えてくださいます。

藤田牧師のこのメッセージに耳を傾けたあと、ルターがその人生でうつ病に苦しんだという資料があることについても考えました。重たい雲に空が覆われるドイツで、うつ病は今でも発症例が多い病気のひとつですから彼が病んでも不思議ではありません。しかしルターの場合は家庭に既にこの病気が存在したということももうひとつ、宗教改革を推進して支持者が多くなればなるほど、支持者らが教会から迫害を受け、拷問され、命を落とすことも少なくない状況へと移されていくのを目の当たりにして、深く悩む日々を送っていたという事実があります。うつ病は、いわゆる出口が見えない闇の中に突き落とされるような気分になる病気であると聞いていますので、ルターが特にこの詩を愛したもう一つの理由は、深い淵の底で神の赦しと救いを求める詩人の気持ちがルターの心に共鳴するものがあつたのではないかと、という気がしました。